方向を表す複合助詞について
――「に対して」「にむかって」「にむけて」を中心に――

馬小兵

キーワード：方向、複合助詞、構文機能、意味

要　旨

「に対して」「にむかって」「にむけて」などいわゆる「方向」を表す複合助詞は、統語上、意味上それぞれどのような共通点と相違点があるのか。「に対して」「にむかって」「にむけて」句は、どんな文の成分になるのか、また文のどの成分に関連するのか、さらに「に対して」「にむかって」「にむけて」句を含む文の主語、「に対して」「にむかって」「にむけて」に先行する名詞、「に対して」「にむかって」「にむけて」がかかる述語のタイプは、どうなっているのかなどを中心に、論を進めていく。

0. はじめに

本論文では主として、「に対して」「にむかって」「にむけて」など、いわゆる「方向」を表す複合助詞の用法を確認し、それらの構文上・意味上の共通点と相違点を明らかにすることを目的とする。

いわゆる「方向」を表す複合助詞というと、「に対して」「にむかって」「にむけて」などが挙げられる。その意味について、『日本語文型辞典』(1998) では、以下のように説明されている。

「に対して」は、「そのものごとに向けて／応じて」などの意味を表し、後ろにはそれに向けられた行為や態度など、なんらかの働きかけを示す表現が続く。

「にむかって」は、ものが移動する際の方向を表したり、時間や状態が変化する際の行く先を表したりする。

「にむけて」は、場所や方位を表す名詞を受けて、ものの移動して行く先や、人の姿勢の向きなどを表す。

(1) a. 目上に対して敬語を使うのは、ひとり日本だけの社会習慣ではない。
b. 駅員の姿は見えなくて汽車は動きそうに見えないが、駅の方に向って避難者が後から後から押しかけている。
c. 民主党は、解散総選挙に向けて自民党の有力議員の選挙区に目玉候補を次々と擁立しています。

(2) a. 彼はある殺人者（○に対して　×にむかて　×にむけて）強い興味を持つようになった。
b. 男は新宿方面（○にむかって　×に対して　×にむけて）歩いていった。
c. 国の後輩（○にむけて　×にむかって　×に対して）日本の紹介文を書いた。

以上、(1) が示すように、「に対して」「にむかって」「にむけて」は、全て付属する名詞（N）に後接した形で後続する述語にかかり、意味上確かに「方向」と説明してもいいようなことを示している。

また、(2) が示すように、「に対して」「にむかって」「にむけて」はそれぞれ交替できない。

それでは、「に対して」「にむかって」「にむけて」とそれらに先行する名詞（以下「に対して」「にむかって」「にむけて」句という）を含む文は統語上、意味上それぞれどのような特徴があるのか、また「に対して」「にむかって」「にむけて」句はそれぞれどういうふうに違っているのか、さらに共通点として「に対して」「にむかって」「にむけて」句は統語上においてどういう役割を果たしているのかなどのような問題があると思われる。

本論文では、以下のことを観察し、上記の問題を中心に論を進めたいと思う。

1．統語上「に対して」「にむかって」「にむけて」句は、どんな文の成分になるのか
2．意味上「に対して」「にむかって」「にむけて」句は、文のどの成分に関連するのか
3．「に対して」「にむかって」「にむけて」句を含む文の主語、「に対して」「にむかって」「にむけて」に先行する名詞、「に対して」「にむかって」「にむけて」がかかる述語のタイプは、どうなっているのか。

また、本論文では、便宜上文の主語をＮ１に、複合助詞「に対して」「にむかって」「にむけて」に先行する名詞をＮ２に、文の目的語をＮ３に、述語動詞をＶにして、考察していく。

1. 「に対して」

1.1. 「に対して」の構文機能

「に対して」の用法を、構文機能、つまり「に対して」句は文のどんな成分になるのかから分析するというような研究には、山下他（1994）、馬（2002）、馬（2003）と馬（2004）などがある。その内容は以下のようにまとめられる。

A.「N 1 がN 2 に対して（○を）V」のような、目的「ヲ」格と交替可能なタイプ
B.「N 1 がN 2 に対して（○に）（N 3 を）V」のような、相手・目標「ニ」格と交替可能なタイプ
C.「N 1 がN 2 に対して（×を×に）V」のような、他の格助詞と交替不可なタイプ

(3) a. 加藤が、横須賀の出張に対して（○を）、やや渋ったのは宮村健のことだった。
b. 私の質問に対して（○に）何も答えてくれなかった。
c. 由紀子は純一に対して（??に／??を）自分の行為に苦しんでいる。

また、「に対して」句が直接動詞の対象となるもの以外に、動詞が名詞化して述語動詞の目的語として現れ、意味上「に対して」句が動詞と対象との関係を構成する場合もあり、つまり、意味上「N 1 がN 2 に対してN 3 をV」＝「N 1 がN 2 をV（N 3)」。

(4) a. 顔に傷のある人の心理に対して、僕は随分今まで勘違いをしていた。
a′. 顔に傷のある人の心理を勘違いしていた。
b. だいいち私はいったい誰に対して警戒をすればいいのだ？
b′. 私はいったい誰を警戒すればいいのだ？

1.2. 「に対して」の他の成分

ここで言いたいのは、「に対して」句が構文上・意味上文のどの成分に関連するのかということである。

A.「N1がN2に対して（○を）V」の場合は、「に対して」は目的「ヲ」格に相当し、直接述語動詞にかかり、述語動詞の必須補語になっている。「N1とN2とV」の関連は、「N1がN2をV」とまとめられる。

(5) このため浅井氏に対して（○を）十分以上に懐柔しておかねばならなかった。

B.「N1がN2に対して（○に）（N3を）V」の場合は、「に対して」は相手・目標「ニ」格に相当し、述語動詞の必須補語になっている。[*1*2]「N1とN2とV」の関連は、「N1がN2にV」とまとめられる。具体的に（6）aと（6）bが示すように「「N1がN2に到着せず向かってVする」のような場合もあるが、（6）cが示すように、「N1がN2にむかってVなる」のような場合もある。ただし、（6）cの場合は「に対して」が述語動詞の必須補語にならない。

(6) a. しかし、このグルー大使の警告に対して、アメリカの政府、海軍の首脳は、あまり真剣な興味を示さなかった。
b. また私は京大生、東大生に対して劣等意識をもっている。
c. 相当歩いてふりかえって見ると、彼のシュプールの跡は目標に対してかなり左の方へ曲っていた。

C.「N1がN2に対して（×を×に）V」の場合は、「に対して」は、必須補語、

---

*1 この点については、寺村（1982）、塚本（1991）では説明されているものの、どんな「ニ」格になるかについては説明されていない。

*2 論文筆者の調べでは、「に対して」については、以下のような例もある。

a.河合千代子個人に対しても、同情や共感と共に非難が殺到した。

b.捕れるかどうか微妙な打球に対して、選手が飛び込むことが勇気と根性の証みたいに思っている指導者や親もいます。

c.今回は、まだ付き合っていない人に対して、本命ﾁｮｺを渡す方法について、紹介したいと思います。

d.右投手が左打者に対してカットボールを投げる目的は“詰まらせる”ことにある。

副次補語にならず、副詞的要素のような働きを果たしている。「Ｎ１とＮ２とＶ」の関連は、「Ｎ１がＮ２へＶ」とまとめられる。この場合、Ｎ２は述語によって要求されるものではなく、Ｎ１がＮ２に到着することはなく、副詞的要素として、述語の方向を示すことになる。

(7) a. 彼女は彼が自分に対して（??に／??を）何を考え、何をもくろんでいたか、よく分かっていた。
b. これでケンは相手の人物に対して（??に／??を）は認識を改めた。
c. 青沼禎二郎は女に対して（??に／??を）なかなかのベテランのようだった。
d. 美徳に対して（??に／??を）は、誰もがとかく、意地悪になりがちなものである。

1.3. 「に対して」句を含む文の各成分の構成

ここで言いたいのは、「に対して」文の主語、「に対して」の先行名詞、「に対して」句がかかる述語がどのような言葉で構成されているのかということである。

以上まとめてみると、以下のような現象を考察することができる。

A．目的「ヲ」格と交替可能なタイプ

主語の場合は、以下のようになる。

「相手・彼ら・皇帝・太郎・中国・母・僕・わたし」

先行名詞の場合は、以下のようになる。

「援助・彼ら・計画・家来・自分・出張・女性・処置・商品・診察振り・信憑性・心理・追求・出来事・発言・反応・防衛・命令・両方・われわれ」

述語の場合は、以下のようになる。

「援助する・嫌がる・遠慮する・思う・解釈する・懐柔する・感謝する・勘違いする・空襲する・警戒する・嫌悪する・嫉妬する・渋る・心配する・準備する・信用する・説得する・調査する・同情する・とりなす・批判する・放任する・容赦する・喜ぶ・評価する・知る」

B．相手・目標「ニ」格と交替可能なタイプ

主語の場合は、以下のようになる。

「妹・英国・会社・彼・皇帝・魚・首脳・乗客・同僚・日本・部長・訪問者・わたし」

先行名詞の場合は、以下のようになる。

「相手・貴方・兄・アメリカ・依頼・援助・音響・奥さん・海軍・外国人・外部・彼・看護婦・敢闘・休暇・軍人・警告・声・国鉄・盃・殺人者・質問・自分・住人・処置・成功・ソ連・大臣・大統領・誰・出来事・ドイツ・トルコ兵・努力・本部・見方・目上・問題・役人・ライバル・論文・わたし」

「に対して」句がかかる述語の場合は、以下のようになる。

「言う・打ち明ける・(言葉を)送る・解釈する・書く・語る・感謝する・激動する・口外する・答える・叫ぶ・質問する・釈明する・説明する・誓う・問う・怒鳴る・述べる・反論する・布告する・表する・表明する・呼び掛ける・(お経を) 読む」

「与える・表す・憤る・抱く・会釈する・脅かす・(妬みを) 覚える・賭ける・感じる・強要する・禁ずる・下す・配る・加える・抗議する・断る・逆らう・捧げる・差し出す・殺到する・仕掛ける・示す・授与する・請求する・注ぎ込む・対抗する・出す・挑戦する・使う・抵抗する・戸惑う・投げかける・(疑問を) 残す・払う・腹を立てる・反抗する・反対する・反応する・反発する・復讐する・服従する・負ける・見せる・向ける・(反感を) 持つ・求める・寄せる・要求する」

C. ほかの格助詞と交替不可なタイプ

主語の場合は、以下のようになる。

「あなた・解雇・彼女・彼・候補・自分・青年・多国籍軍・誰・手紙・人間・人々・わたしたち・」

先行名詞の場合は、以下のようになる。

「愛情・異性・運命・女・過去・彼・彼女・危害・教授・軍人・好意・候補・死・事件・自分・女将・人生・人物・出来事・電文・乗合・内野手・迫害・人・美徳・夫人・友情・夢・力士・わたし・」

述語の場合は、以下のようにまとめられる。

行為動詞が一番よく使用され、存在動詞、形式動詞が使用される場合もある。動作動詞はめったに使用されないものの、言語活動や思考活動を表す動詞が使用される。

また、以下のように、形容詞と名詞などが「に対して」句を含む文の述語になる場合もある。

D．形容詞述語[*3]の場合は、以下のようなものである。

「鋭敏だ、穏やかだ、面白い、懐疑的だ、寛大だ、厳しい、厳格だ、公平だ、残酷だ、小心だ、親切だ、誠実だ、従順だ、自信満々だ、心配だ、鄭重だ、冷たい、強い、情け深い、破壊的だ、恥ずかしい、批判的だ、敏感だ、不機嫌だ、不賛成だ、不満だ、盲目だ、やさしい、有効だ、用心深い、よそよそしい、冷酷だ、冷淡だ、悪い」

E．名詞述語の場合は、以下のような例である。

(8) a. じつは彼女はぼくに対して冷感症なのです。

b. 解雇は最も重い処分で、現役力士に対しては初めてのことです。

2. 「にむかって」

2.1. 「にむかって」の構文機能

「にむかって」の文法機能を論じる研究はあまり見られないが、本論文は以下のようにまとめている。

A．「N 1 がN 2 にむかって（○に）V」のような、着点「ニ」格と交替可能なタイプ

B．「N 1 がN 2 にむかって（○に）（N 3 を）V」のような、目標「ニ」格と交替可能なタイプ

C．「N 1 がN 2 にむかって（×に）V」のような、「ニ」など他の格助詞と交替不可なタイプ

(9) a. 駅員の姿は見えなくて汽車は動きそうに見えないが、駅の方に向って（○に）避難者が後から後から押しかけている。

b. 芹川は、そう言うと、作業員たちと共に東方に向って（○に）頭を垂れた。

c. このトンネルは出口に向かって（×に）下り坂になっている。

*3「に対して」句と述語になる形容詞との関連については、本論文は触れないことにする。

また、動詞が名詞化して述語動詞の目的語として現れ、意味上「にむかって」句が動詞と対象との関係を構成する場合もあり、つまり、意味上「N 1がN 2にむかってN 3をV」=「N 1がN 2をV（N 3)」。

(10) a. 子路としては先ず己の主人を救い出したかったのだ。さて、広庭のざわめきが一瞬静まって一同が己の方を振向いたと知ると、今度は群集に向って煽動を始めた。

a′. 群集を煽動した。

2.2. 「にむかって」の他の成分との関連

ここで言いたいのは、「にむかって」句が構文上・意味上文のどの成分に関連するのかということである。

A. 「N 1がN 2にむかってV」の場合は、「にむかって」は着点「ニ」格に相当し、述語動詞の必須補語になっている。N 2はN 1の「到着点」を示し、Vは移動の意を表す動詞である。よって、意味上「N 1がN 2に到着する」と理解してもいい。「N 1とN 2とV」の関連は、「N 1がN 2に（着点）V」とまとめられる。

(11) a. 風の方向で悪臭が庁舎にむかって流れる日もあった。

b. 僕らに向って大人たちが殺到した。

c. 両国の関係は最悪の事態に向かって一気に進んでいった。

B. 「N 1がN 2にむかってV」の場合は、「にむかって」は目標「ニ」格に相当し、述語動詞の必須補語になっている。N 2はN 1の「目標」を示し、Vは移動の意を表さない。よって、意味上「N 1がN 2に到着せず、N 2へV（する）か、またはV（なる)」と理解してもいい。「N 1とN 2とV」の関連は、「N 1がN 2に（目標）V」とまとめられる。

(12) a. あの子は親に向かって乱暴な口を利くようになった。

b. 男は時計に目をやり、それから大男に向ってぱちんと指を鳴らした。

c. このトンネルは出口に向かって下り坂になっている。

d. 観客席は天井にむかって鉢状になっている。

e. 将来にむかって医療水準が高まるにつれ、需要も多くなるにきまっている。

C.「N１がN２にむかってN３をV」の場合は、「にむかって」は着点「ニ」格に相当し、述語動詞の必須補語になっている。N２はN３の「到着点」を示し、Vは移動の意を表す動詞である。よって、意味上「N１がN２をN３に到着させる」と理解してもいい。「N１とN２とN３とV」の関連は、「N１がN２に（着点）N３をV」とまとめられる。

(13) a. 投手は捕手にむかってボールを投げる。
b. 課長は俊介にむかって、ひきだしから厚い書類綴りをだし軽く投げてよこした。

2.3. 「にむかって」句を含む文の各成分の構成

ここで言いたいのは、「にむかって」文の主語、「にむかって」の先行名詞、「にむかって」句がかかる述語がどのような言葉で構成されているのかということである。

以上まとめてみると、以下のような現象を考察することができる。

A. 着点「ニ」格と交替可能なタイプ

主語の場合は、以下のようになる。

「男・大人たち・おれ・課長・彼・汽車・客・魚雷・軍団・子供たち・魚・諸君・選手たち・男性・短艇・投手・野良猫・飛行機・避難者・船・渡り鳥」

「悪臭・関係・時間・砂・潮流・火炎・矢」

先行名詞の場合は、以下のようになる。

「駅の方・沖・海面・壁・艦影・小屋・艦尾・北・車・ゴール・俊介・上空・上流・新宿方面・斜面の下・船体・線路・庁舎・鉄棒・東京・西・ノート・僕ら・捕手・南・森」

「完成・記憶・死・事態・未来」

述語の場合は、以下のようになる。

「歩いていく・移動する・押しかける・泳ぎだす・逆戻りする・殺到する・出発する・進んでいく・滑って行く・迫る・突撃してくる・突進する・飛

び立つ・南下する・投げる・吐き出す・這う・走り続ける・引き返す・横切る」
「遠ざかる・流れる・降り続く」

B．目標「ニ」格と交替可能なタイプ
主語の場合は、以下のようになる。
「あの子・男・踊り子・女・外国兵・学生・彼・機銃・子供たち・自分・二郎・司祭・生物・芹川・先生・太郎・ひとりひとり・わたし」
先行名詞の場合は、以下のようになる。
「渦・海・親・大男・下方・崖・カメラ・彼・艦隊・汽車・客・敷石・島・受話器・上空・上司・新聞記者・生存者・生徒の方・敵・東方・畑・母・風船・プール・方向・僕・仏様・マリア像・夜気・闇・連中・わたし・われわれ」
述語の場合は、以下のようになる。
「(正体を) 明かす (手を) 上げる・(手を) 合わせる・言う・歌う・うなずく・送る・(顔を) 傾ける・(口を) きく・叫ぶ・(祈りを) 捧げる・差し出す・(手を) 差し伸べる・(態度を) 示す・(頭を) 垂れる・(火を) 吐きつづける・発砲する・(手を) 振る・微笑みかける・呼びかける」
「合図する・祈る・頷く・撃つ・怒る・合掌する・抗弁する・求婚する・頭を下げる・挙手の礼をする・態度を示す・紹介する・頭を垂れる・使う・吐き出す・発する・発射する・拍手する・申し込む・笑う」
「挨拶する・言う・訴える・語る・がなりたてる・聞く・講演する・声を掛ける・叫ぶ・ささやく・質問する・主張する・しゃべる・尋ねる・怒鳴る・伝える・話す・はやし立てる・吹きかける・報告する・ほえる・申し上げる・呼ぶ・わめく」。

C．「ニ」など他の格助詞と交替不可なタイプ
主語の場合は、以下のようになる。
「観客席・高津岬・土産物・トンネル・並木」
「関係・寒さ・需要・負担」
先行名詞の場合は、以下のようになる。
「奥・出口・天井・東京湾・北西」
「開戦・時代・将来・需要・春・冬」

述語の場合は、以下のようになる。
「(暖かく）なる・(多く）なる・(厳しく）なる・(下り坂に）なる・(狭く、広く…）なる・高まっていく・(鉢状に）なる・増える」
「傾斜する・そびえる・設置する・倒れる・立つ・突き出す・続く・連なる・並ぶ・伸びる・昇る・配置する・はためく・広がる・曲がる・廻る・盛り上がる・横たえる」

3. 「にむけて」

3.1. 「にむけて」の構文機能

「にむけて」の構文機能について、本論文は以下のようにまとめている。

A.「N 1 がN 2 にむけて（○に）V」のような、着点「ニ」格と交替可能なタイプ
B.「N 1 がN 2 にむけて（○に）（N 3 を）V」のような、目標「ニ」格と交替可能なタイプ
C.「N 2 にむけて（×に）N 1 が（N 3 を）V」のような、他の格助詞と交替不可なタイプ

(14) a. 飛行機は北にむけて（○に）進んでいた。
b. 彼は戦争の当事者にむけて（○に）停戦協定の締結を訴え続けた。
c.「脱官僚政治」の実現に向けて（×に）鳩山内閣がスタートしました。

3.2. 「にむけて」の他の成分との関連

ここで言いたいのは、「にむけて」句が構文上・意味上文のどの成分に関連するのかということである。

A.「N 1 がN 2 にむけてV」の場合は、「にむけて」は着点「ニ」格に相当し、述語動詞の必須補語になっている。N 2 はN 1 の「到着点」を示し、Vは移動の意を表す動詞である。よって、意味上「N 1 がN 2 に到着する」と理解してもいい。「N 1 とN 2 とV」の関連は、「N 1 がN 2 に（着点）V」とまとめられる。

(15) a. 男は慣れた足どりで上流にむけて歩きはじめた。
b. 我々は全速力で溝の中を前方にむけて走った。
c. 飛行機はヨーロッパにむけて飛び立った。

B.「N1がN2にむけてV」の場合は、「にむけて」は目標「ニ」格に相当し、述語動詞の必須補語になっている。N2はN1の「目標」を示し、Vは移動の意を表さない。よって、意味上「N1がN2に到着せず、N2へV(する)」と理解してもいい。「N1とN2とV」の関連は、「N1がN2に(目標)V」とまとめられる。

(16) a. 学長は新入生にむけて祝辞を述べた。
b. 人々にむけて戦争の終結を訴えた。

C.「N2にむけてN1が(N3を)V」の場合は、「にむけて」は具体的な着点や目標を示すのではなく、ある抽象的な目標を示し、そして常に文頭に現れ、文全体にかかる、いわゆる副詞的な要素のような働きを果たしている。

(17) a. 新たな時代に向けて、私たちはいろいろな課題をかかえています。
b. ジュニア選手の育成やライバル選手の視察などを重点的に行い、将来のオリンピックに向けてレベルアップを図りたいとしています。
c. また、「国際的な経済システムの実現に向けて、引き続きリーダーシップを発揮していきたい」と述べました。

3.3. 「にむけて」句を含む各成分の構成

ここで言いたいのは、「にむけて」文の主語、「にむけて」の先行名詞、「にむけて」句がかかる述語がどのような言葉で構成されているのかということである。

以上まとめてみると、以下のような現象を考察することができる。

A. 着点「ニ」格と交替可能なタイプ

主語の場合は、以下のようになる。

「医師団・彼ら・首相・捜査・飛行機・船・水・水の柱・われわれ」

「先行名詞」の場合は、以下のようになる。

「上・解明・北・基地・虚空・前方・タイ・病院・被災地・ブルジョア性・

ヨーロッパ・任地」

述語の場合は、以下のようになる。

「歩き始める・移動する・出航する・出発する・進む・旅立つ・飛び立つ・走る・飛行する・離陸する」

B．目標「ニ」格と交替可能なタイプ

主語の場合は、以下のようになる。

「学長・彼・警官・指揮者・新聞関係者・わたし」

先行名詞の場合は、以下のようになる。

「アメリカ・客席・後輩・新入生・当事者・逃走車・人々・星・隣家・ロンドン」

述語の場合は、以下のようになる。

「頭を下げる・撃つ・書く・シャッターを切る・銃を構える・送信する・手を振る・発射する・発信する」

「挨拶する・言う・訴える・語る・叫ぶ・どなる・述べる・話す・微笑する・放送する・呼びかける」

C．他の格助詞と交替不可なタイプ

主語の場合は、以下のようになる。

「首脳会談・団員たち・日本・民主党・私たち」

先行名詞の場合は、以下のようになる。

「オリンピック・解決・開催・核廃絶・公演・今後 10 年・実現・再建・早期復帰・総選挙・大会・訪米・立候補」

述語の場合は、以下のようになる。

「課題を抱える・稽古に励む・候補を擁立する・スタートする・前進する・調整を続ける・判断材料を提供する・リーダーシップを発揮する・レベルアップを図る」

4. 「に対して」「にむかって」「にむけて」比較

4.1. 共通点

A．「に対して」「にむかって」「にむけて」は、格助詞と交替可能な場合があり、文の成分として必須補語となっている。

B.「に対して」「にむかって」「にむけて」とも目標「ニ」格と交替可能な場合がある。

N1がN2に対して／にむかって／にむけて（○目標「に」）（N3を）V[*4]

C.「に対して」「にむかって」「にむけて」とも、副詞的要素になって述語にかかる場合もある。

N1がN2に対して／にむかって（×に）（N3を）V
N2にむけて（×に）N1が（N3を）V

4.2. 相違点

A.「に対して」は目的「ヲ」格と交替可能な場合があるのに対し、「にむかって」と「にむけて」は交替ができない。

B.「N1がN2に対して／にむかって／にむけて（○目標「に」）（N3を）V」については、文の構造としては同じであるものの、以下のような違いがある。

a.「に対して」の場合は、文の主語は有情物であり、「に対して」の先行名詞は有情物か抽象的な意味を表す名詞が多く、場所名詞がほとんどない。

b.「にむかって」の場合は、文の主語は有情物であり、「にむかって」の先行名詞は場所名詞か有情物であるが、抽象的な意味を表す名詞がほとんどない。

c.「にむけて」の場合は、文の主語は有情物であり、「にむけて」の先行名詞は有情物、非情物、場所名詞であるが、そこには主語になる有情物の行為の標的のようなものがあるというニュアンスもある。

C. 方向を表す場合、「に対して」はあくまでも実施する動作の方向を示すにとどまる。それに対して、「にむかって」と「にむけて」は実施される動作の方向を示すのみならず、さらに「にむかって」は意味上主語と目的語の「到着先」を、「にむけて」は意味上主語の「到着先」をも示している。

---

*4 その違いについては、相違点で述べることにする。

D．「Ｎ１がＮ２にむかって／にむけて（○着点に）Ｖ」については、文の構造としては同じであり、Ｎ２が同じくＮ１の「到着点」を表すものの、以下のような違いがある。

a．「にむかって」の場合は、文の主語は有情物であるが、非情物である場合もある。「にむかって」の先行名詞は場所名詞であるが、抽象的な意味を表す名詞もあり、述語は移動の意を表し、多くは意志動詞であるが、非意志動詞の場合もある。

b．「にむけて」の場合は、文の主語は有情物である。「にむけて」の先行名詞は場所名詞であり、その場所には主語になる有情物が来るのを待つ予感があるというニュアンスがある。述語は移動動詞であると同時に、出立ちを表すニュアンスも示している。

E．「に対して」は、形容詞述語、名詞述語とも共起する。「にむかって」と「にむけて」はできない。

F.述語動詞がそれぞれ違っている。

参考文献

グループ・ジャマシイ編　(1998)『日本語文型辞典』くろしお出版

鈴木智美（2007)『複合助詞がこれで分かる』ひつじ書房

寺村秀夫（1982)『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版

塚本秀樹（1991)「日本語における複合格助詞について」『日本語学』3 月号　明治書院

藤田保幸・山崎誠（2006)『複合辞研究の現在』和泉書院

马小兵　(2002)《日语复合格助词和汉语介词的比较研究》北京大学出版社

馬小兵　(2003)「中国語の介詞“对”と日本語の複合格助詞「に対して」について」『文教大学文学部紀要』第 16-2 号 日本文教大学

马小兵　(2004)〈日语复合格助词「に对して」和单个格助词「に」的替换使用〉《语言学研究》第三辑 北京大学外国语学院语言学研究所　高等教育出版社

马小兵 (2005)〈试论日语宾语的表现形式及与汉语的比较〉《日本语研究》第三辑
商务印书馆
马小兵 (2006)〈日语复合格助词连用修饰向连体修饰的转换〉《日本学研究》十六
北京外国语大学
馬小兵 (2007)「複合助詞「としては」と「にしては」について」《日本語と中国語とその体系と運用—村木新次郎教授還暦記念論集》学苑出版
馬小兵 (2008)「複合辞「としては」「にしては」「にしてみれば」について」《日本语学研究》上海教育出版社
森田良行・松木正恵 (1989)『日本語表現文型』アルク
山下明昭・山内博之・島田麻美 (1994)「に対しての文法機能」『国語と教育』18 号
大阪教育大学

[付記] 本論文は、2008 年度中華人民共和国教育部人文社会科学研究企画基金項目『日语复合格助词在语法结构中的确地位研究』(批准番号：08 ＪＡ 740002) の階段的成果であり、2009 年 9 月第三回清華大学・北京大学・筑波大学三大学合同セミナーにおいて口頭発表した内容を再構成したものである。本論文の作成にあたり同セミナーのメンバーにコメントを頂き感謝申し上げる。

マ ショウヘイ／北京大学外国語学院 准教授
(2009年１０月３０日 受理)